

国文学研究資料館蔵『かせんむすめはなくらべ』について

山下則子

*キーワード

娘評判記／山中共古旧蔵／京都茶屋

一、書誌

『かせんむすめはなくらべ』とは、国文学研究資料館蔵『一枚刷他貼込帖（仮題）』（請求番号 ヤ9・500・1〜2）に貼り込まれている新出資料である。安永期頃の京都在三十六人の娘評判記と思われ、外題の「かせん」とはその評する娘の人数三十六人を、三十六歌仙に擬えたことに拠る。故に「かせんむすめはなくらべ」は「歌仙娘花競」と漢字をあてることもできよう。なお、当該資料が貼り込まれている『一枚刷他貼込帖』には、「山中文庫」の蔵書印があり、山中共古の旧蔵資料であった可能性が高い。以下『かせんむすめはなくらべ』（以後「歌仙娘花競」と表記する）について、次の項目に従って述べる。

一、書誌

二、考察

三、翻刻・写真版

【外題】―かせんむすめはなくらべ

【内題】―なし

【表紙】―縦十三・七cm×横十九・一cm 横本、本文共紙、手彩色。

なお本書裏表紙には、封じ紙と思われる朱色の小さい紙が版心中央部に残る（写真版参照）。このような封じ紙は、娘評判記類に付されていると思われる。例えば明和六年（一七六九）の娘評判記『評判娘名寄草』の蜀山人識語に、「その比封じてひさきしを予か家にも求め置り評判娘名寄草といふ標題ばかり青く板にてすりたりき」とある傍線部分―封じて売っていた―を証するものである。なお、この蜀山人識語を『洒落本大成』第四卷（昭和五十四年刊）解題で、中野三敏氏は「即ちかかる類のものは大方写本で、表紙に外題のみ刷りつけて売り歩いたものらしい」としているが、同卷所収の芸子評判記『あづまの花』解題で中野氏も「本書はれっきとした板本で、縦小本一冊というところに、洒落本との近似をよ

り強く示している」と指摘しているように、本書『歌仙娘花競』も板本である。

【丁数】—三丁。

【本文匡郭】—縦十二・五cm×横十七・四cm

【版心】— 一 ▲ (丁付け 一〜三、終)

【刊年】—未詳。本資料と一緒に綴じられている『嶋原燈籠番付』は「安永九年子の七月十五日より福井平右衛門板」とあり、本書も恐らく安永期(一七七二〜一七八〇)頃の板行と思われる。なお「福居平右衛門」は、『近世書林板元総覧』(井上隆明、日本書誌学大系76、平成十年刊)に、享保期から京都で正本を扱った板元とされている。

【板元】—未詳。

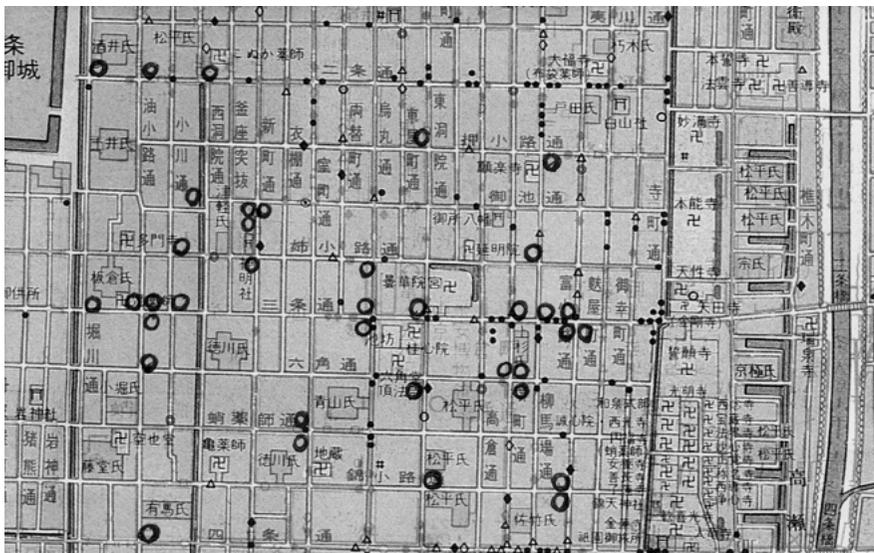
【備考】—『歌仙娘花競』が貼り込まれている『一枚刷他帖込帖(仮題)』には、「山中文庫」の蔵書印がある(写真版①②参照)。この蔵書印と全く同型の蔵書印は国文学研究資料館HP「蔵書印データベース」に載らない。即ち『近代蔵書印譜』初編(中野三敏、日本書誌学大系41、昭和五十九年刊)、『蔵書名印譜』第二輯(朝倉治彦編、臨川書店、昭和五十二年改訂新版)に載らない。また、『増訂新編蔵書印譜』(後藤憲二、渡辺守邦、日本書誌学大系103、平成二十六年刊)にも同型の蔵書印は所載されない。しかしながら、この貼り込み帖の内容(珍しい近世中期の見世物や演劇の番付類、古銭等)から、民俗学研究者であった山中共古の旧蔵と推測され、山中共古の蔵書印の一つと思われる(注1)。

二、考察

本書『歌仙娘花競』の内容は、位付け、住所、女性の名前、その女性の名前や店名を詠み込んだ発句から成る。位付けは全て「大極上々吉」であり、住所は京都の四条通りから二条通りまで(南北)、富小路通りから堀川通りまで(東西)であり、その地域に比較的偏在すること無く存在している(地図の○印参照、注2)。

店名は、「白木屋」「伊勢屋」「重井筒屋」「筒井筒」(計三句)「信濃屋」「漆屋」「丹後屋」「菊屋」「桔

の内容は、位付け、住所、女性の名前、その女性の



梗屋」「ます屋」「越後屋」(計二句)「嶋屋」「ひらかな屋」「亀屋」「鴈金屋」「実播磨屋」「槌屋」「春雨屋」「河内屋」「橘屋」「吉野屋」「こめ屋」などが句の中に詠み込まれている。また句の中には、「薄化粧」「千切(ちぎり)」「婚札」「契り」「新枕」「女夫鴉」「逢ふ」「衣を脱ぐ」「暮を待つ」「睦言」「もつれ合ふ」などの語も見られる。

これらのことから、本書『歌仙娘花競』は、京都の四条通りから二条通りまで、富小路通りから堀川通りまでに存在した茶屋の娘評判記ではないかと推測する。それは水茶屋に対して、所謂色茶屋と通称された類いのものである。江戸時代中期の京都色茶屋に関する先行研究はほとんど存在しない。元禄期に頂点に達した公許の傾城町島原が、早くも享保期には衰退し、北野・祇園・八坂・清水といった地域に茶屋が軒を並べていたこと、特に鴨川沿岸の開発にともなって造成された新地が新たな遊興の場所として繁栄したこと、幕府が島原を優位に保とうとして何度も取り締まり対策を講じたことなどは『京都の歴史6 伝統の定着』(京都市編 学芸書林 昭和四十八年刊)に概説される。しかし特に通史的観点からこれらを解明したものは少ないが、守屋毅氏『京の町人―近世都市生活史』(教育社歴史新書107、昭和五十五年刊)の「四 遊里の変遷」が元禄期から寛政期の京都遊里に通史的展望を与えている。

色茶屋の詳細な記述などは洒落本に散見される。もともと京都色茶屋の股賑は、洒落本流行よりも遡ること甚だしい。洒落本の鼻祖とされる『両巴唇言』刊行の享保十三年(一七二八)よりも六十年近く以前の寛文十年(一六七〇)に、既に「右茶立女猥之由詮議之上遊女召置候茶屋御

仕置ニ申付られ候」(注3)と、色茶屋への度々の取り締まりがあったことが記録され、その盛行ぶりを物語る。『洒落本大成』第二十四巻の付録(昭和六十年十一月刊)「茶屋・呼屋・置屋(京)」での中村幸彦氏解説は、短文ながら京都の茶屋文化の広大さと複雑さをつぶさに伝えるものである。氏は、天明期以前から西の島原よりも河東の花街が好まれ繁盛した結果として、茶屋が立派になり、「青楼」「青楼遊」との文字が天明期洒落本に見えると指摘し、茶屋には「大楼」「小楼」の別があったとする。

洒落本中の茶屋及びそこに従事する女性達は次のように描写される。宝暦初年頃(一七五一〜五五頃)刊行の洒落本『本朝色鑑』(小野必大著『本朝食鑑』元禄八年・一六九五・刊のもじり)には、色茶屋の娘に関する次のような記述がある。書き下し文にして引用する。

○茶立女 或は見世附茶屋女

：茶屋一店に二人を限る也。古代の憲法也。今二人に限らず、五六人、七八人、茶店によりて増減有り。頗る京師処々に有り。最も石垣町繩手に多し。風俗も亦繩手石垣を以て見世附の最上と為す。七條新地藪の下、北野八軒、清水坂、頂妙寺新地、高台寺門前之に次ぐ。夜々店に居り人を招くに「為奈御這入、為奈御入」の言語有り。深更に及ぶと雖も、客至らざれば、店を引くこと能す。以て行燈を高く燈火を点し、則ち人に風俗を看する。客則ち此の軒に行廻し、意に應ずるを以て、乃入て之に姪す。：

即ち宝暦期には、既に鴨川東側の二条から五条までを中心に、色茶屋が数多く存在していたことがわかる。群小の茶屋の燈火の下、店付き茶

屋女達が深更に及ぶまで客引きをしていた様子がかがえる。一方、立派な茶屋の様子は、天明三年（一七八三）刊の洒落本『徒然醉か川』（艶好法師〈西村定雅〉著、耳鳥斎画）に描かれる。そこでは「月見るにこそなくさむものなれ。ある人の茶屋ばかりおもしろさものはあらしといひしに：総て酔といふものは茶屋遣ひをするが酔にもあらねど、まづ茶屋といふ物が、心をやはらげ人情をしる物ゆへ、茶屋狂ひに酔の名有：」と、京都での「粹」とは「大楼」での茶屋遊びから生まれた美意識であるとする。享和四年（一八〇四）刊の洒落本『嘘之川』に描写される「小楼」は、一間半の張出格子、一階に火の気のない台所と一室、二階に一室と三畳間があり、仲居と花車と雑用係の少女が居て、客は二階の一室で食事をし娼妓の到着を待つ。外から娼妓とその妹が呼ばれて来る、という規模のものと思われる。一方、粹などの美意識とは程遠い、最も賤小狭隘な色茶屋については、『鴨東四時雜詞』（文政九年・一八二六・刊、画餅居士著、綾洲山人増注）に次のようにある。書き下し文にして引用する。

楼館最も賤小狭隘なる者、門に入れば則厨竈有。其甚き者、一室一厨楼、梯其間に在り。客多くは弦歌盃酒を須ひず。只枕席之欲を買う而已。凡そ諸楼館厨中皆八方燈を懸く。

そして、曲亭馬琴が『羈旅漫録』（享和二年・一八〇二・刊）に「凡洛中半は皆妓院なり。京の節儉なる人氣にて、かく多き遊のそれ／＼に世わたりすること、第一のふしぎ也。客は春他国の人三分二、地の人三分一也。秋より冬のうちは、地の人三分二、旅人三分一なりと云。故に秋冬はさみ／＼し」と記したように、江戸時代の京都色茶屋の繁盛は、古く

からの観光地であったことを一つの理由としている。

本書『歌仙娘花競』がどの程度の茶屋の茶立女を評したものであるのかは未詳である。恐らくはあまり大きくはない色茶屋の、店付き茶屋女の評判記ではないかと推測する。しかし本書が対象とする色茶屋は、鴨川東の地ではない、富小路通りから堀川通り、四条通りから二条通りまでの地域に存在している点が注目される。更に本書『歌仙娘花競』が洒落本ではなく、役者評判記付けの形式の茶屋娘評判記であり、このことは江戸で刊行された娘評判記の影響を受けたものではないかと思われる。

『江戸名物評判記案内』（中野三敏、昭和六十年刊、岩波新書）第三章名物評判記の沿革」中の名物評判記一覧にある娘・女房類の評判は、宝暦九（一七五九）年成立の役者女房評判記『女意亭有嗽』をその嚆矢とする。そして書誌でも引用したように、明和六年（一七六九）に水茶屋の娘評判記が江戸で流行したことがわかる。その理由を、中野氏は茶屋娘評判記『江戸評判娘揃』の中の文章を引いて、鈴木春信画一枚刷り錦絵の流行がその背景にあるとしている。本書『歌仙娘花競』は安永頃に京都で刊行されたものと思われる、江戸水茶屋の娘評判記流行からの影響を受けて成ったものではないかと思われる。

三、翻刻・写真版

【翻刻】

(表紙) かせんむすめはなくらべ

(一ウ)

三条東洞院辺

大極上々吉

おはな

袖覆ふ高宮しまの花こゝろ

六角堺町辺

同

おんめ

薄化粧白きや一つ闇の梅

西洞院二条辺

同

おきく

所望せんひしやげた窓の菊重

六角通堺町辺

同

おゝぎ

浜萩は伊勢や難波の花くらべ

三条堺町辺

同

おたけ

君またぬ夜は若竹の千切かな

蛸薬師室町辺

同

おまつ

若みどり重井つゝや水かゝみ

(二オ)

姉小路柳馬場辺

同

おらん

菊の香の水に残るやつゝ井筒

柳馬場押小路辺

同

おはぎ

若萩の伊勢路信濃や初参宮

東洞院押小路辺

同

小きく

解かゝる越後の春の野菊哉

姉小路小川辺

同

おりう

紅葉する手染（際）うるしや龍田姫

新町姉小路辺

同 おゆり

鬼百合も折く花とさゝやきて

同御池辺

同 おふし

呉竹のやしなひかねし藤かづら

(二ウ)

油小路三条辺

大極上々吉 おつた

葛紅葉丹後や丹波雲の脚

東洞院錦辺

同 おかぢ

紅みは西村時雨かちまくら

新町御池辺

同 小むめ

皆人のほだしときくや梅紅葉

同町辺

暁を奪ふ桔梗やなしの花

おなし

烏丸通三条辺

同 おまき

婚礼のしまだいますや牧の春

同姉小路辺

同 おくり

くり返す越後や加賀の品定

(三オ)

同三条辺

同 小菘

江戸づまに難波なまりや花の菘

三条油小路辺

同 おもと

鳴やしま日のいづる本月の本

六角東洞院辺

同 小さゝ

ひらかなやかたかな形りの小さ、原

富小路三条辺

同 おすき

亀や鶴間に契りし神の杉

同辺

同 おしい

椎の実に雪の越後や新まくら

同錦辺

同 およね

早わさを乞ふ雁金やかたをなみ

(三ウ)

富小路錦辺

大極上々吉 おつけ

実播磨やゑの恋路の告鴉

油小路四条辺

同 おむく

つ、井筒我をふりむく氷室鏡

富小路三条辺

同 おふき

槌や紙袖ふき返(通)す初紅葉

同 二条油小路辺

同 おねむ

女夫鴉が嶋かくれけりねむの花

同 同堀川辺

同 小べに

春さめや小紅の花の物思ひ

同 西洞院御池辺

同 おはぜ

逢ふて逢ふ夜はつ、井筒露時雨

(四オ)

三条堀川辺

同 おたけ

衣を脱く竹の河内や通ふ神

同 小川三条辺

同 おまつ

暮を待つ窓橘や他こゝろ

蛸薬師室町辺

同 おはな

睦言を花とよしのや月の眉

油小路三条辺

同 小ゆり

姫ゆりや枝川崎の前わたり

六角油小路辺

同 おふじ

もつれ合ふ小ばたの水の花籬

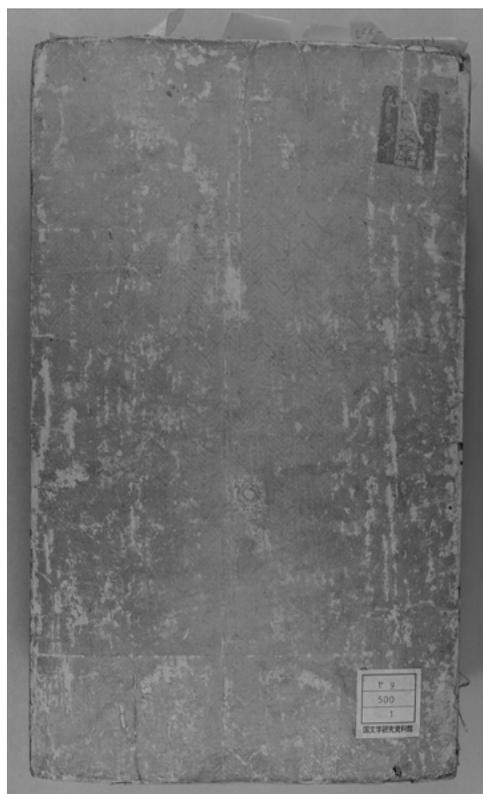
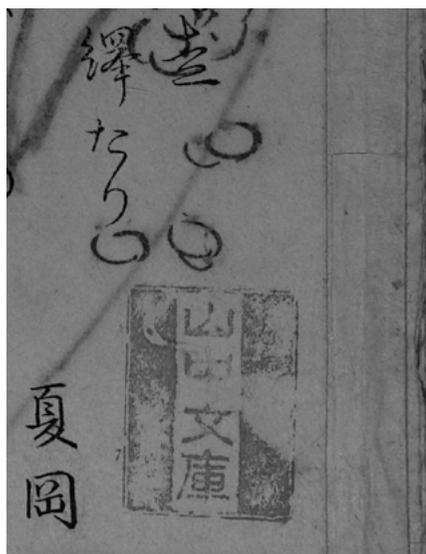
同堺町辺

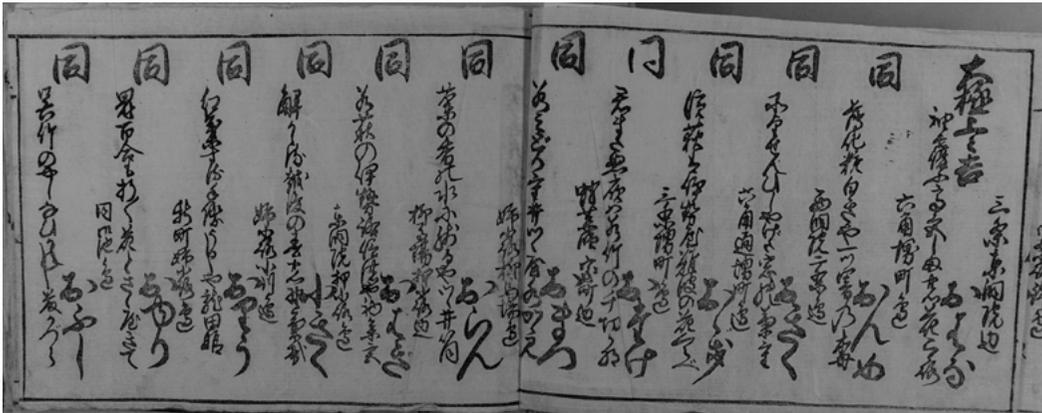
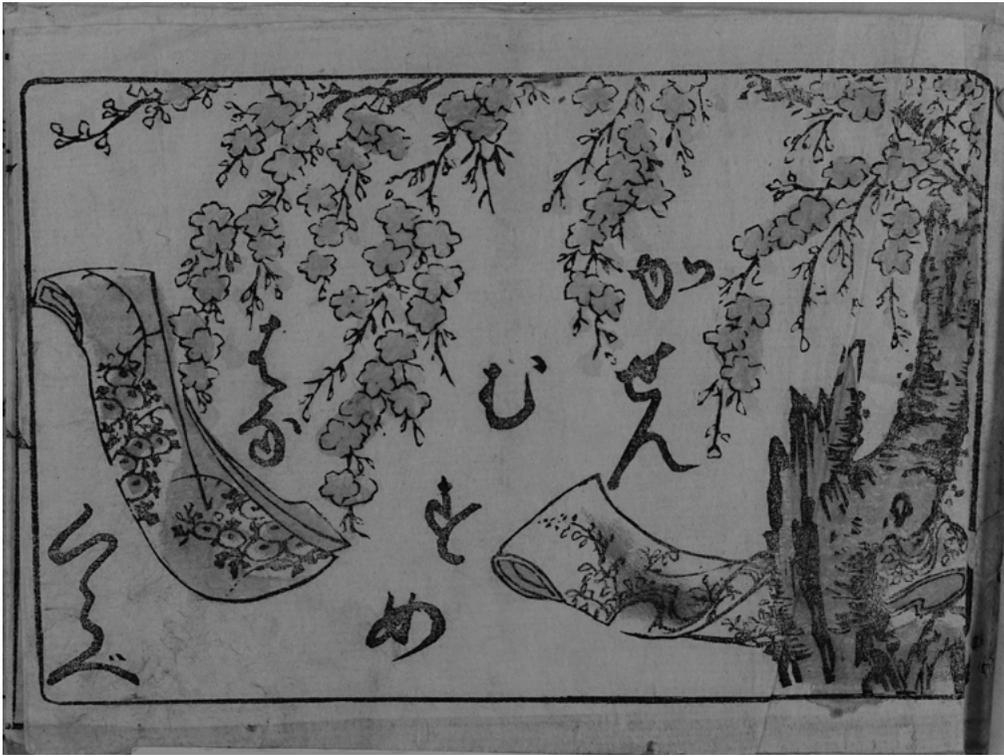
大極上々吉 おらん

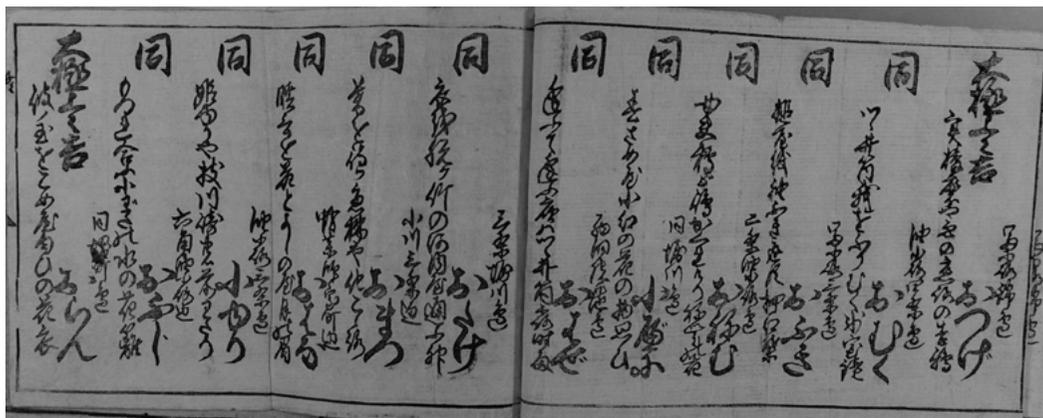
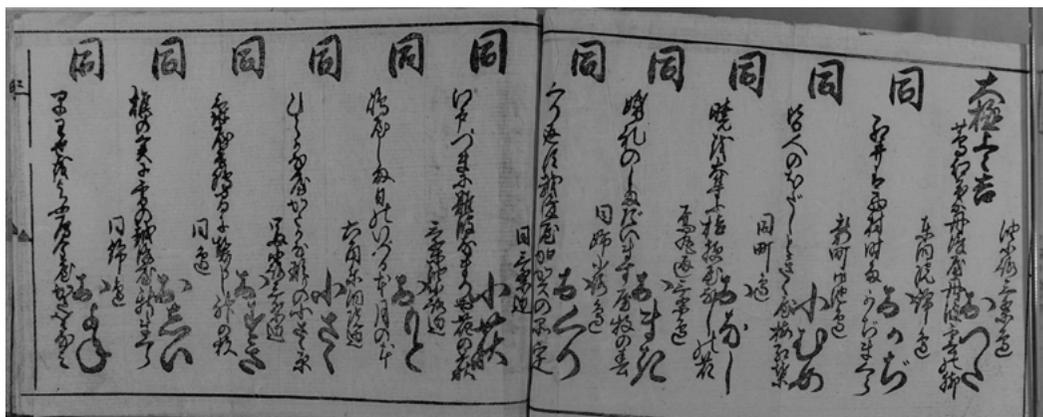
彼の玉をこめや匂ひの花衣

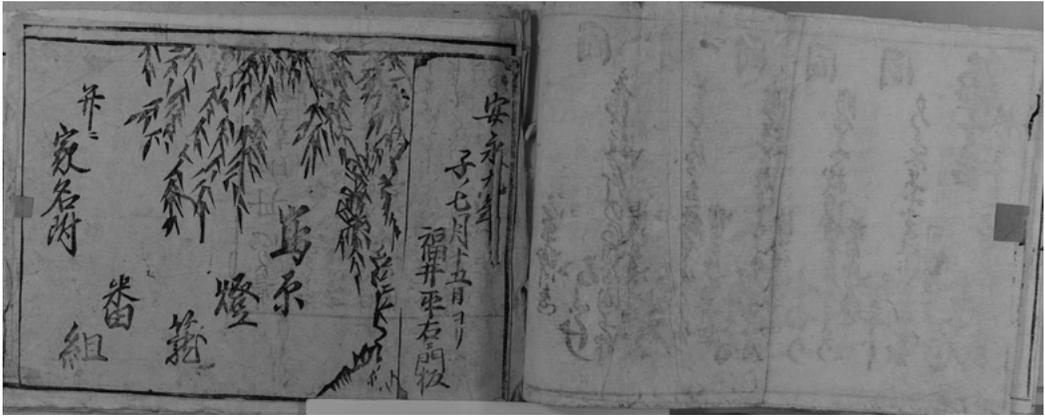
【写真版】

『一枚刷他貼込帖（仮題）』の蔵書印









(注)

- 1, 『山中共古全集一〜四』(日本書誌学大系46、昭和六十〜六十二年刊)。
および岩波文庫『砂払―江戸小百科―』(昭和六十二年刊、山中共古著、
中野三敏校訂)解説等参照。
- 2, 『地図にみる京都の歴史』(『京都の歴史』編纂会編 昭和五十五年刊)
所収「六 伝統と文化の都市―京都(天明・文化期を中心に)」の地図(作
図 森図房 森三蔵)の一部分に加筆した。
- 3, 『京都御役所向大概覚書』二所収、「六十九 京都茶屋・旅籠屋有之場所、
同茶屋敷ならび旅籠屋敷之事」(清文堂史料叢書第五 昭和四十八年刊)

『かせんむすめはなくらべ』の写真版掲載をご許可下さった国文学研究
資料館に感謝いたします。また本稿を成すにあたり、貴重なご助言を賜
りました伊藤善隆氏、武井協三氏、二又淳氏、宮崎修多氏に深謝申し上
げます。

